



Jan & Dean
"Surf City And Other Swinging Cities"
Liberty [US] ●LRP3314
[1963]
incl. 'Surf City'

ーフィンをしなかったので、サーファーだった弟のデニスから聞いた話を曲にしたということだ。63年にチャート1位になったジャン&デインの「サーフ・シティ」は、その世界を作った代表曲と言ってもいい。ブライアンとジャン・ペリーによる共作だ。曲の最初はコーラスの「Two girls for every boy」で始まる。すべての少年に二人の女の子、つまりみんなが、両手に花の状態というこの歌詞だけで、アメリカの中高生男子のハートを掴んだ。「I bought a '30 Ford wagon and we call it a woody」= 30年代のフォードのワゴンを買ったんだ、愛称はウディだよ。サーファーたちが愛用していた30年代のバン型の車だ。両側には木製パネルが付いていたから、ウディと呼ばれていた。「You know it's not cherry, but it's an oldie but a goodie」= ビカソカじゃないし古いけどすごくいいんだよ。

と車を自慢している。この「cherry」は、綺麗に仕上がっていることを意味する。ちなみに、カリフォルニアでは今でも15歳半で車の免許を取れる。ここでコーラスがまた入り、サーフ・シティに行けばみんな波乗りかパーティーをしている、たくさん女の子がいるから、ただウインクすれば二人の女の子が手に入られる、と歌われる。次のヴァースでは、もしもウディが道で壊れたら、サーフボードを背負って、ウェットスーツを着て、サーフ・シティまでビッチハイクするんだ。そこに着いたら「Shoutin' the curl」= 波の一番いいところを乗るんだよ。そして、すべての男子が両手に花と繰り返し返され、曲が終わる。まさに夢のような内容の歌だ。

次はビーチ・ボーイズの最初のヒット曲、63年の「サーフィン・USA」だ。全米チャートでは3位に達した。もともとはチャック・ペリーの「スウィートリトル・シックスティーン」のメロディーに、サーフィンをテーマにした歌詞をのせたものだ。この曲を聴くと、どこに住んでいるアメリカ人も、海へ行つてサーフィンをしたくなる。歌詞はこう始まる。もしもアメリカの州

り、お酒も出さない店だったので、近所の高校生やサーファーたちが集まり始めた。ライヴの初日はたった17人の客だったが、次第にどんどん増えて、半年くらい経つて彼がライヴをやめたときには大人気の店になっていた。ディックはフェンダーのストラトキャスターをフル・ヴォリュームで使い、毎回アンプのスピーカーを飛ばしていたそう。フェンダーの開発者のリオ・フエンダーが、なぜ全部飛んでしまうのかとある晩にディックのライヴを観に行った。そこで4000人のファンが騒いでいるのを見て、これではもつと大きな音を出せる機材が必要だと、ジェイムズ・ビー・ランシングという名前のスピーカー会社に行き、15インチのスピーカーを開発してもらった。それが今では有名なJBL D130 FVだ。ちなみにディック・デイルの「ミザル」は94年の『パルプ・フィクション』のサントラでリヴァイヴァルした。

61年にデビューしたビーチ・ボーイズの影響で、インストのサーフ・ミュージックはだんだん消えていく。ブライアン・ウイロンが作るサーフィンの世界は、ちよつと大げさで、ロマンティックだった。自身はサ



The Beach Boys
"Surfin' U.S.A."
Capitol [US] ●T1890 [1963]
incl. 'Surin' U.S.A.'

すべてにカリフォルニアみたいに見えるだろう。みんなサーフィンをしているのだから、そこでバギーズを穿いているの見えるだろう。これは、サーファーが穿くトランクだ。当時のアメリカでは、まだほとんど人がびつたりとした海パンを穿いていたが、サーファーはゆるいバギーズを愛用した。また、サーファーの必須アイテムに「Hurachi sandals」がある。メキシコで買える安いサンダルだ。サーファーは暖かいメキシコに、よくサーフィンしに行っていたからだ。当時のアメリカでサンダルを履くのは、ビートニックか子供しかいなかった。だから一般人々には、まるでサーファーたちは大人にならなくていい『ピーター・パン』の世界にいるかのように聞こえたんだ。次のヴァースからは、色々なサーフ・ポイントの名前が並べられる。大半がカリフォルニアのサーフ・ポイントだ。▲みんな



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第17回

実は秋が似合う、サーファーの曲

秋に入り、夏の暑さが少しづつ薄れていくのは、ちよつと寂しい。太陽はまだ熱く輝いているが、日陰に入ると冷たい空気を感ずる。そんな頃に、なぜサーフ・ミュージックなのか？ それは、サーフィンにとっては夏より秋の方が理想的な季節だからだ。カリフォルニアでは、秋になるとインディアン・サマーという暖かい日和がある。風も海から吹かず、陸から海に向かって吹き始める。この風が波をグルグル回してガラスのような美しい面を作り、気持ちいい波を作ってくれる。日本なら秋は台風がたくさんやってくる季節で、サーファーはその波を待つと待っている。というわけで、秋だからこそサーフィン絡みの曲の紹介だ。サーフ・ミュージックといえば、もともとはインストの音楽だった。ディック・デイルという、サーファーだったギタリストが、1961年にインストの「レット・ゴー・トリップ」 という曲をリリースして、少し話題になった。彼は同じ頃、カリフォルニアのニューポート・ビーチのバルボア桟橋の近くにある店を借りて、ライヴを始めた。△ランデブー・ボールルーム△という店だ。ここは28年に作られ、当時はほとんど閉店状態だったが、海のすぐ近くにあ

ら、お酒も出さない店だったので、近所の高校生やサーファーたちが集まり始めた。ライヴの初日はたった17人の客だったが、次第にどんどん増えて、半年くらい経つて彼がライヴをやめたときには大人気の店になっていた。ディックはフェンダーのストラトキャスターをフル・ヴォリュームで使い、毎回アンプのスピーカーを飛ばしていたそう。フェンダーの開発者のリオ・フエンダーが、なぜ全部飛んでしまうのかとある晩にディックのライヴを観に行った。そこで4000人のファンが騒いでいるのを見て、これではもつと大きな音を出せる機材が必要だと、ジェイムズ・ビー・ランシングという名前のスピーカー会社に行き、15インチのスピーカーを開発してもらった。それが今では有名なJBL D130 FVだ。ちなみにディック・デイルの「ミザル」は94年の『パルプ・フィクション』のサントラでリヴァイヴァルした。

61年にデビューしたビーチ・ボーイズの影響で、インストのサーフ・ミュージックはだんだん消えていく。ブライアン・ウイロンが作るサーフィンの世界は、ちよつと大げさで、ロマンティックだった。自身はサ

がサーフィンに行ったよ、サーフィンUSA。6月になるのが待てない、夏はサーフ・トリップにずつと行っているよ！先生には僕たちはサーフィンに行ったと言っておいてくれ。アメリカの夏休みは3か月あるので、長い旅ができる。最後にハワイのビッグ・ウェイヴ・ポイント・ワイメアの名前が出てくるが、ビーチ・ボーイズは発音を間違えて、ワイミアと歌っている(笑)。

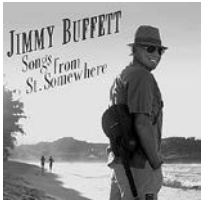


The Turtles
"The Turtles Present Battle Of The Bands"
White Whale [US] ©WWS7118
[1968]
.....
incl. 'Surfer Dan'

ズが63年にリリースした「サーファー・ジョー」が元になっているようだ。これはすごく恰好いいサーファーのジョーが、車をスッ飛ばして海に行く話で、「サーファー・ダン」はそのパロディーにもなっている。曲はオートバイの音から始まり、最初から笑わせてくれる。サーファーは、サーフボードを載せられないバイクにはあまり乗らないからね(笑)。1行目は「Moving so fast you can't see him go by」=速すぎて彼(ダン)が走り過ぎて目に見えないくらいだよ。こんなことがあるわけがない。「He's so ripped he can't see you go by」=彼はすごくラリっているから、君が通り過ぎていくのが見えない。サーファーはヤク中だとバカにしているんだ。その後も彼には27人の彼女がいるなんていうあり得ない話が出てくる。そして、ダンには人気がみんなが彼を探しているという歌詞が続く。探している人の中には母親や父親、そしてサムおじさんもいる。このサムはアメリカの徴兵ボスターに使われるキャラクターで、サーファーのダンには徴兵からも逃げていたという意味。こんなふうには、ビーチ・ボーイズが作ったイメージ。朝から晩までヤシの木の下で気楽に過ごす、そんなサー

で、お前が最後に生きているのを見た。彼の車は、実際にカナダのオンタリオにある街ブラインド・リヴァーで壊れたそうだ。次のヴァースで突然、サーフィンの話になる。別れた女の子を思うように、車も幸せに暮らしているのかな、と想像している。「Maybe the Beach Boys have got you now」=もしかしたら、ビーチ・ボーイズがお前を手に入れているかもしれない。ここでの「お前」とは、故障したためニールが手放した車のことだ。ビーチ・ボーイズの「キャロライン・ノー」を口ずさみながら、何もない海沿いの道を走る。彼らはきつと波があるうちに着きたいんだろうと、歌詞が続く。ここでは、「キャロライン・ノー」と同じコーラスが入る。なぜここで急にサーフィンの話が出てくるのかは不明だが、ニールはカリフォルニアの海のそばに住み、周りにはサーファーもたくさんいるから、きつとその影響があるのだろう。

俺はマークがサーファーだということが信じられないが、歌詞を彼が書いたかと思うと面白い。ブライアン・ウィルソンも自分はサーフィンをしていないが、サーフィンの曲は書けたからね。この曲は年老いたサーファーが、まだまだサーフィンを続けるという話がテーマだ。彼は毎日のように陽が暮れる直前の海に行き、暗くなるまで波乗りをする。もう大きな波には乗らなくても大丈夫。「I've got nothing to prove」=もう証明することがない。サーファーは若い頃は色々な技を学び、どこまで大きな波を乗りこなせるかとチャレンジ精神旺盛だが、年齢を重ねると、そういうことにはあまり意味がなくなっていく。「I've still got my old noserider」=まだ俺は古いノーズライダーを持っている。この「noserider」は大きくて長いサーフボード。大きなボードの方が先端で立つのが楽なんだ。あまり



Jimmy Buffett
"Songs From St. Somewhere"
Mailboat [US] ©MBD2150
[2013]
.....
incl. 'Oldest Surfer On The Beach'

ファーはいないとタートルズは歌っている。

●

ステイヴン・ステイルスとニール・ヤングのステイルス・ヤング・バンドが76年にリリースした「太陽への旅路 (Long May You Run)」は、車が永遠に走ればいいと願う曲だ。この曲はニール・ヤングが昔乗っていた車のためのオマージュなのに、サーフィンの話が入っているのが面白い。最初は女の子の話を歌っているように聞こえるが、実は壊れて動かなくなった車の話だ。曲はこう始まる。「We've been through some things together」=俺とお前は色々一緒に経験してきた。「With trunks of memories still to come」=トランクからは、今でも思い出が出てくる。もちろん、ここは車のトランクにかけている。「Back in Blind River in 1962, when I last saw you alive」=62年のブラインド・リヴァー



The Stills-Young Band
"Long May You Run"
Reprise [US] ©MS2253
[1976]
.....
incl. 'Long May You Run'

ボードを動かさず、ただ立っただけでもいい。「There's nothing that I want to do, no place I'm trying to reach」=もうやりたこともないし、行こうとしている所もない。つまり、ただボードの上立っただけで満足だ。「Only time is now more precious to the oldest surfer on the beach」=海で最も年長のサーファーには、時間が一番大切だ。年を取ると、残っている時間がどんどん貴重になってくる。それは波の上に乗っている時間も同じだ。「I stopped searching for perfection many waves ago」=俺はもう何年も完璧な波を探していない。今が一番大事だから、波に乗る瞬間を味わい尽くしたい。最後には「The water is going grey like me」=海の水も俺のようにだんだんグレーになっていく。日が暮れていくと海水も少しずつ灰色になり、自分と同じになるという。俺も中学生のころからサーフィンをしていて、今は本当にこんな気持ちだ。マークは誰と話をしても、この曲を書いたんだろう？きつとジミー・バフェットだろうね。俺も、今は大きな波に乗ることはあまり興味がない。ただ波を味わって、できるだけ長く乗ることを大切に思っている。